

生態系サービスと集落活性化～地域調査運動の方法～

小金澤孝昭*・庄子 元**・佐々木 達***

Ecosystem Service for Regional Development

Takaaki KOGANEZAWA, Gen SHOJI and Toru SASAKI

要旨：本報告では、中山間地域の里山を活性化する方法として、生態系サービスの再評価と再供給を交流人口の増加という経済的需要に対応して進めることを検討した。具体的に生態系サービスを活用した集落活性化を論じる場合、まずは地域を知ることからはじめ、次いで身の丈サイズのイベントを行い住民参加のスタートを切ることである。西会津町の実践では、①景観調査②お宝マップ調査③集落ヒアリング調査（親戚ネットワーク調査）を行い、その成果を持ち寄って学生達との交流会を開催した。またイベントとしては食の展覧会を実施して住民参加の意識を印象付けた。

キーワード 里山、生態系サービス、地域調査運動、集落活性化、中山間地域

1. はじめに

東北地方の中山間地域では、集落の高齢化や集落周辺地域の耕作放棄地が増加している。中山間地域の間活動の衰退を放置すれば、集落の消滅、周辺土地利用の放棄、利用され、管理されてきた森林の放棄が進むことになる。放棄された集落や農地、森林はいずれ、2次的であれ自然生態系に回帰していく。いずれ、日本の中山間地域の多くがこの道をたどり、中山間地域の土地利用の放棄が進んでいく。こうした国土利用を仕方の無いことだととらえるのか、重大な環境破壊と受け止めるのかは見解が分かるとこれある。しかし、現時点では、当事者ないしは一部の人以上の日本国民の多くは前者の仕方が無いという見解を取っている。

放棄された集落、農地、森林は時間をかけて、自然生態系に回帰していく。しかし、その回帰過程の生態系はとても脆弱であるため、洪水や豪雪に大きな影響を受け、水害や土石流の被害を発生させる。台風シーズンになると、各地の山林が地すべりなどで放火するニュースが頻発している。これらは、いずれも人間が

利用してきた農地や山林の管理を放棄してきた結果といえる。こうした災害が発生するたびに国民は新たな災害復旧の負担を強いられている。しかし、台風だから仕方がないと災害の原因を自然要因に求めるため、負担を負担と感ぜないのが実態である。

人間は長い時間をかけて、自然生態系に働きかけ、それを活用して様々な便益を受けてきた。原野を畠や畑にし、湿地を水田にし、食糧を得てきた。また、森林を伐採し、木材として活用し、植林し循環的な利用を図ってきた。広葉樹では、これを伐採しても樹木の萌芽更新の力を借りると循環的な利用が可能となり、定期的に伐採することによって持続可能な薪や炭の生産が可能となった。また、自然生態系に恒常的に働きかけ、管理・維持することによって、豊かな水源の確保や土壌への栄養源の供給を図ってきた。このように自然の恵みを、人間は自然生態系に働きかけることによって得てきたのである。しかし、現在、私たちはこうした自然の恵みを放棄しようとしている。

2010年の生物多様性条約COP10に向けて国連大学

* 宮城教育大学教育学部社会科教育講座, ** 宮城教育大学大学院生, *** 札幌学院大学

高等研究所は、『里山・里海の生態系と人間の福利』を出版し、日本で育まれてきた社会生態学的に生産景観を評価した。ここでは、自然の恵みと称されてきたものを生態系サービスとして再定義して、これらが人間の福利にどのような効果を示してきたかを検討した。里山の生態系サービスは4つにされている。栄養塩循環や土壌形成を促進する「基盤サービス」、食糧や飲料水、木材、燃料を供する「供給サービス」、気候変動や洪水調節、疾病制御、水の浄化などの「調整サービス」、精神的影響、教育効果、レクリエーション機会を提供する「文化的サービス」である。

本研究では、この生態系サービスの考え方を活用して、中山間地域の里山地域での集落崩壊、耕作放棄、森林管理放棄を少しでも食い止める方策を検討したい。放棄した集落、農地、森林を自然回帰させる前に、今存続している集落、農地、山林を出来る限り手入れして持続的な維持管理の方策を考えていくことがまずは求められている。研究目的は、生態系サービスを活用した集落活性化の考え方を整理することと、具体的な事例を使って集落活性化を進める方策としての地域調査・地域調査運動の効果を検討したい。事例地域としては、福島県西会津町上谷地区を取り上げた。

2. 生態系サービスを活用した集落活性化

(1) 生態系サービスの交流資源化

中山間地域の地域振興や集落活性化を考える場合、地域資源の活用が議論されている。地域資源の活用は従来から行われてきたものであるが、1950年以降の生活様式的大幅な変化により、それらの多くが代用品の登場や他地域の生産物と競合したことによって衰退してきた。里山地域を代表する木材は、輸入木材との価格競争に敗れて、放置され管理されなくなった。また広葉樹資源の活用先であった木炭も、電気・ガスエネルギーに取って代われ、衰退した。また基幹作物であった養蚕・葉たばこ、和紙なども競争の結果衰退した。中山間・里山地域の生態系サービスである主要農林産物の供給が維持されなくなる中で、山林・農地の維持管理が後退し、里山の調整サービス自体も低下していく。経済的な価値を失った里山は、人間活動とのかかわりが薄くなるにしたがって、景観や里山の本

来持つ調整機能を失い、生態系サービスの大きな柱である文化的サービスの供給も低下する。このように、日本の多くの里山で生態系サービスが後退し、利用されなくなり、生態系自体が劣化し始めている。

里山を再生していくためには、再度里山の生態系サービスを活用する方法が考えられる。しかし、生態系サービスが低下したのは里山での経済的需要が失われたからである。とすれば新たな需要をどのように探すのが課題となる。2000年代の社会は、ITの普及でどこからでも地域の情報を入手可能になり、移動交通手段も多様になっている。こうした情報化社会での新たな経済的需要は、情報の交流と交流人口による生み出されつつある。経済的需要といっても、中山間地域の多くが必要としているのは、ビッグビジネスではなく、生活可能レベルの中小規模の需要であり、集落活性化レベルでは、さらに小規模な経済的な需要で活性化可能となっている。

この情報交流による交流人口の増加といった経済的需要に対応していけば、生態系サービスの再評価と再供給が可能となる。とりわけ、経済的需要の高いものとしては、水資源や景観、レクリエーション機能、食文化などである。こうした供給サービスや文化的サービスを供給するためには、里山の管理の徹底による調整サービスの機能を高めていくことである。生態系サービスは総合に関連しており、交流人口需要に対応して、供給サービスと文化的サービスを高めていけば、その過程で調整サービスも同時に高まる可能性は高いのである。後述する福島県西会津の事例では、桐・杉の産地として維持管理されてきた里山が豊富な水資源や山菜を供給し、交流人口を維持してきた経緯がある。衰退する中でも維持されてきた生態系サービスをより活性化することによって集落の活性化は可能となる。

(2) 生態系サービス評価と地域調査

里山の地域資源である生態系サービスを再評価していくための方法としては、従来から行われていた地域調査運動や地域資源を活用したイベントによる地域活性化の方法などがある。1980年代以降の地域主義、地域活性化、ふるさと創生運動などで様々な地域活性化や地域調査の方法が議論され、その後地元学や地域調査の方法などが確立していった。

地域活性化のための調査運動は、秋田県十文字町(1988)や稲川町(2000)で、地域住民主体の調査運動として始まった。これらの地域では、地域農業振興施策作りの中で採用された方法である。地域住民は自分達の地域のことを客観的に認識する機会を持っていないので、意外と地域のことを知らない場合が多い。そこで役場職員、農協職員、集落代表者でチームを作り、住民アンケート、集落アンケート、農業者アンケート、集落ヒアリング調査、地域資源調査(湧水、神社、食文化など)を実施した。住民自身が調査者となって地域を調査する取り組みである。その内容については小金澤(1991)を参照されたい。この調査運動の方法を、地域活性化計画に応用したのが、長野県JAいいやまみゆき(1993)の「ふつうのふるさと作り計画」である。この調査では、特に地域資源調査に力を入れて取り組んだ。ここでは地域資源マップ(お宝マップ)作りを農協職員総出で完成させた。こうした調査運動の成果から、基本的な調査の方法として、①景観調査②お宝マップ調査(地域資源調査)③集落ヒアリング調査の3つに整理した。景観調査は、お宝マップ調査の予備調査扱いであるが、調査者自身が地域全体を観察して、観察情報の記録化を行う作業である。お宝マップは、景観観察やヒアリング調査で得た情報を元に、地域資源(生産物、湧水、文化財、食文化、文化財など)を地図化する作業である。現代間で言えば生態系サービスの地図化作業といえる。ヒアリング調査は集落の人的構成、家族構成、親戚関係、生産規模、農林経営状況などを調査するもので、地域づくりの担い手である住民の主体的力量がどの程度あるのかを測定する重要な調査である。

こうした、調査活動を踏まえて地域に見合ったイベント交流の実施も地域活性化の方法である。とくに研究室活動の一環として、学生と住民の交流という方法で地域活性化交流を行ってきた。最初に行った学生との集落住民との交流では、山形県金山町のがっこそばでの体験(1999年)から始まった。この地域では廃校になった分校の活性化プロジェクトに参加する形で行い、その交流は現在まで続いている。2005年からは、宮城県栗原市金成有壁地区の地域づくりに参加した。ここでは地域資源マップの作成やブラックバスの生息

調査を兼ねた「ため池」の池さらいイベントを行った。この調査イベントは3年間継続され、学生と集落住民の交流が地域活性化に大きな意味を持つことが実感されたものだった。2010年からは、福島県の事業である「学生の力を活用した集落活性化事業」に参加し、西会津町の調査イベントを行った。今回の調査イベントで行った「食の展覧会」は、結城登美雄氏が宮城県宮崎町で実施した手法を参考にして活用した。

以上の方法論的考察を踏まえて第3章ならびに第4章では西会津町で実施した地域調査運動の実際を紹介することとした。

3. 西会津町上谷地区での地域調査の実際

(1) 地域概要

福島県西会津町は福島県の西北端に位置し、新潟県に接している(図1)。西会津町の面積は平成22年において298.13平方kmであり、そのうち約3分の1にあたる105.67平方kmが山林になっている。西会津町の最高点である荒岩山の1,579.9mを筆頭に、数々の山に抱かれている地域である。こういった地形条件から西会津町は、町全域が特別豪雪地帯に指定されており、1月の降雪量は227cmにも及ぶ。

また、西会津町の総人口は平成17年の国勢調査によれば、8,237人であるが、このうち65歳以上の割合は39.7%、平均年齢は52.9歳であり、高齢化が進行している。高齢化の進行とともに、西会津町では人口の自然減が昭和50年以降、発生している。加えて転出が転入人口を上回る社会減も昭和40年以降、減少数には各年において差があるものの、一貫して続いている。このように西会津町では過疎化、高齢化が進展しており、平成22年には町全域が過疎地域に指定

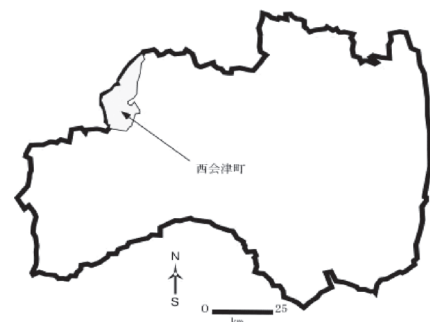


図1. 西会津町の位置

されている。

今回、調査を行った上谷地区も標高が400mに位置しており、積雪は200cmを優に超える地区である。上谷地区は程窪集落、泥浮山集落、長桜集落、小杉山集落という4集落で構成されており、上谷地区は男性28人、女性35人、合計63人の人口を有している。しかし、西会津町において高齢化が進行している以上に高齢化が深刻であり、高齢化率は程窪集落が50%、泥浮山集落が100%、長桜集落が44.4%、小杉山集落が50%になっている。また、世帯数も程窪集落が7世帯、泥浮山集落が5世帯、長桜集落が6世帯、小杉山集落では9世帯と、高齢化にあわせて過疎化も進展している。こういった状況であるが故に、上谷地区の住民も集落の存続について危機感を持っているのが現状である。

(2) 景観調査

地域住民の方々に、上谷地区4集落を案内していただき、景観を含めた『見どころ』を確認した。住民の方にとっては日々の何気ない景色であっても、来訪者にとっては雄大な景色、癒される景色が数多くあった。

まず、最初は、程窪集落、私たちのほかに10人ぐらいの方が7台ぐらいの車で分乗しながら案内していただいた。程窪集落の特徴は、きれいな水である。水を祭った神社の下の崖から清水が湧き出ている。この水を集落全体で使っているとのこと。水はくせがなく、すっきりしている(写真1)。しかし、清水に名前はない、名無しの水といったところ。この清水周辺には、わさびが自生しているという。水路の脇にこの集落唯一水が飲める場所があった。ホースの先から水が出ている。その脇にコップがかけてあった。その周りにもわさびが自生していた。案内の方に許可をもらい、早速ビニール袋に入れて持ち帰った。小ぶりだが十分使えるわさびで、あとで、生きくらげの湯通しにわさびをあえて、頂いた。程窪集落は、現在6戸が居住し、若い世代の住む唯一の集落でもある。程窪から、時間の関係で、一番上の集落、小杉山に向かう。行く途中、泥浮山、長桜の集落を通過して、2年前に開通した林道にでる。

小杉山集落は、現在8戸が居住している。集落には、廃校になった分校跡があった。またこの集落は1620

年の大地震で集落が消滅した跡に、生き残りの人たちが再建した集落である。そのため、被害を受けた人たちの慰霊碑が造られていた(写真2)。小杉山集落へ向かう間、運転手を勤めてくれた現在郡山に在住の方から、話を聞いた。ようやく比較的若いお父さんたちがたくさんいて案内してくれたのかがわかった。本日12日曜日は集落の草刈の日で、近隣、遠くは会津若松、郡山から集落のおじいさん、おばあさんの息子達が駆けつけていたとのこと。明日から仕事だから、今日だけ付き合うねと郡山方が言ってくれた。彼の説明では、あの人は元高校の校長で、この人は会津若松市役所の部長さんと人材豊富な集落支援ネットワークが存在していることがわかる。

帰りは、長桜集落が管理するわらび園の説明と、わらび園のすぐ下に湧く清水で水を採取する。田崎区長が草をかき分けて、水を汲んでくれた。草むらにおいしい水があるらしい。集落や西会津町が見える展望台に到着。景色は残念ながら霧が上がってきて、見えない。展望台に東屋が立っている。テーブルと椅子は200年物のナラの木で作ったそうだ。後で聞いた話だが、ナラ枯れで切った木のリユースだそうだ。ここもナラ枯れの被害は大きいようだ。

長桜の集落に到着する。古い民家が並んでいる。この集落は6戸が住んでいる。区長の田崎さんのきのこ小屋が見える。菌床しいたけ、きくらげ、原木なめこ、菌床なめこ、きのこマイスターとして頑張っている。長桜集落から少し下りた所に、泥浮山集落がある。現在常時居住している世帯は3戸である。この集落の古民家は、他の集落に無い形をしている。2階建ての曲がり屋である(写真3)。古老の伊藤さんに話を聞くと、養蚕をやっていた名残だという。1階が養蚕の作業場で、日常生活は2階を使ったという。周りの蔵の立派さを見ると、杉と桐と養蚕で栄えた集落の威厳を感じる。道路の脇にあったバッテリーの残骸を見せてくれた。この集落は、集落の中を流れる用水の水量が少ないため、水車はできず、バッテリーを作って米やそばを挽いたという(バッテリーとは、水の力でシーソーを動かして、粉を挽く道具。山間地域によく見られた。岩手県の山形村が有名)。

分校跡に戻り、解散となった。学生達が泥浮山の伊

藤さんから原木なめこを見せてもらった。1本だけ早くでてくるのがあるのだという。

以上の景観調査からこの地区には4つの資源が存在していた。1つは豊富な湧水である。上谷地区の各集落には自慢の湧水があり、とても冷たく、おいしい水であった。集落によっては知り合いに頼まれて送るほどの水である。しかし、水が汲める地点には看板すらなく、整備もされていないのが現状であった。2つは、貴重な歴史遺産である。写真2は1620年の大地震で被害を受けた慰霊碑である。上谷地区は大地震で消滅した跡に、生き残った方が再建した地区であるとわ



写真1. 上谷地区の水汲みポイント



写真2. 大地震の慰霊碑



写真3. 二階建ての古民家

かった。3つは、魅力溢れる古民家の存在である。上谷地区では古民家が多く残っている。そして、この古民家によって、集落がどこか懐かしい空気に包まれている。この古民家の中には、養蚕を行っていた名残から二階建てであり、非常に珍しいものもあった。4つは、豊富な山の幸である。山に抱かれていることもあり、わらびやタラの芽などの山菜、沢には天然のわさびが自生している。この他にも原木栽培のなめこ、きくらげがあり、豊かな山の幸にあふれている(写真4)。

(3) お宝マップづくり

景観調査を踏まえ、地域の『お宝』として互いに共有するために地図化を行った。また、景観調査だけではなく、各集落の方からヒアリングを行いながら地図化を行っていったので、山菜の採取場所や農地の状況などの詳細な『お宝』を示すことができた。お宝マップには、これら上谷地区『お宝』が記載されているだけではなく、来訪者の視点から、駐車可能なスペース、車の運転の際に必要な場所なども盛り込んだ。これはお宝マップが住民の満足で終わるだけではなく、地区外の人へ向けて魅力を発信するためである。

作業手順としては、まず聞き取り調査をおこなった。最初は、集落資源調査である。自分達の地域のお宝資源(山、川、池、森林、水、家、神社仏閣、記念碑、農産物、林産物、食文化、工芸品などなど)を聞き取り、場所が特定できるものは、地図の上に載せていく。聞き取った地図は、模造紙に「集落お宝マップ」を描いていく。

4つの集落のお宝自慢を簡単に整理すると、程窪集落はなんと言っても水である。きれいな水が、水量が変わらず湧き出してくる。そのきれいな大量の湧水が、

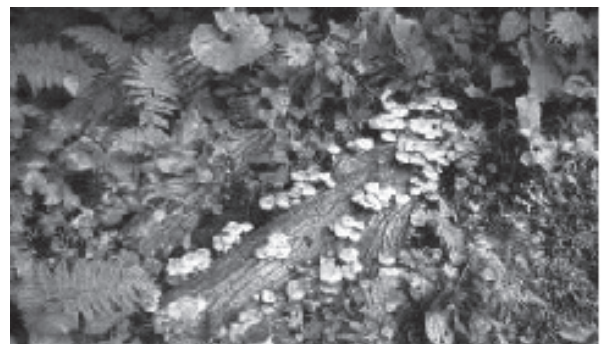


写真4. 原木栽培のなめこ

わさびを自生させている。しかし、自生しているものを時々使用するくらいで、ほどほどに栽培しようとはしていない。民家は300年の歴史を持つものが多いが、手を加えられているものが多く、歴史的価値は低いようだ。この集落の方の姓は全員新田さんである。

泥浮山集落は、世帯数が少ないが、立派な民家や蔵が並び立っている。桐と杉で栄えた集落だが、養蚕を行っていた2階建て民家があり、養蚕も盛んであったことがわかる。蔵の横に大きな鉄板が置いてあり、和紙を乾燥するものだという。昔は和紙作りも行われていた。楮、みつまたを栽培し和紙を漉いていたという。道路わきにはバッテリーの跡もあった。桐と杉を基礎に、日常的には養蚕や和紙を生業にしていた裕福な集落だったようだ。養蚕も和紙もその需要の衰退で姿を消し、杉や桐の価格も下がり、集落から若い人たちが去っていったのである。集落のはずれに、一貫清水が湧いているという。山の幸も豊かで、原木なめこや山菜が豊かである。この集落の姓は全員伊藤さんであった。

長桜集落は、泥浮山集落の隣で、ラクーターで簡単に移動できる距離にある。水と山菜の豊かな集落である。急斜地に古民家が並び立つように建っている。この集落は、桐と杉の林業の集落である。山林はよく手入れされており、国蝶のオオムラサキの自生地もある。手入れされた山林に豊かなワラビが自生するところがあり、10年前から有料わらび園として春に開園している。入園料2000円と高いが、品質がよいので知る人ぞ知るスポットとして人気がある。入場者は、毎年350人程の人が訪れる。集落総出で対応し、高齢者の副収入になっている。

小杉山集落は、この地区で標高が最も高く、展望台からは長桜集落、泥浮山集落や西会津の町並みが見える。この集落には、白沼があり、ニジマスやエビ、タンケ、ツブなどの魚介類が豊富である。集落の周りには桐や杉が豊富で、木材で富を得てきた集落であることがよくわかる。湧き水も豊かで、その豊かな水と標高の高さ、気温の較差を利用して米づくりやそばづくりが行われている。この地区では、水田の基盤整備が整っていて、どの集落でも水田で米作りが行われている。小杉山集落の一部の水田は耕作放棄地化されているが、子供たちの支援で、水稲作業が行われている。

これだけ、水が豊かなところの米作りなのに、農薬や化学肥料を使用する慣行栽培を行っている。水源の郷であること考えれば、農薬や、化学肥料を半減する環境保全米はできるのではないだろうか？そばは作付けされているが、最近では作付面積が労働力不足を理由に減少している。集落のお母さんたちはそば打ち技術があるものの、そばを栽培しなくなってから、そば打ちもここ5年程やっていないとのこと。そばを打つ機会があれば、せっかくの技術が生かされるのにもったいない話である。

図2は、小杉山集落のもので、壁に張り出した地図を概略化したものである。このような地図に、写真やヒアリング結果から得た詳細な情報を手書きで掲載し、集落の住民との交流会において、話題の材料として活用した。

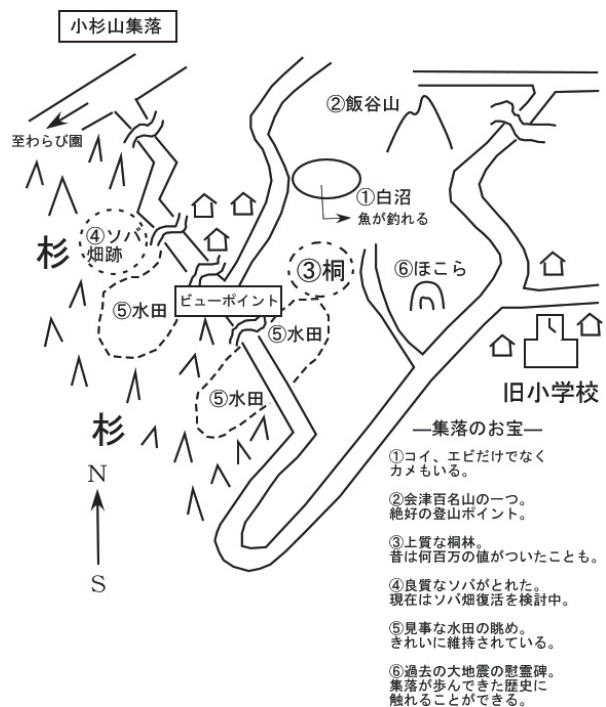


図2. 小杉山集落マップ

(4) 集落ヒアリング調査 (集落の親戚ネットワーク調査)

集落調査は、世帯別の家族構成、農林業経営、集落組織の参加などを聞き取る調査である。この集落調査は、農業集落でよくやる方法だが、今回は世帯数が少ないので、従来はやらない親戚ネットワーク調査もおこなった。これは、海外の調査 (中国・インド) でよ

くやってきた方法で、出稼ぎの多い中国で親戚ネットワークを示す図は、親戚のネットワークが地域の農業を支えている現実があるので、この方法は効果的であった。日本の限界集落と呼ばれる集落調査も、この調査は有意義なものとなった。

調査結果を家系図に示すと、現状では集落にいる世帯を支えるネットワークの裾野は広く、比較的近隣の地域に居住している子供たちが多くことがわかる。限界集落といってもこの地区は、まだ地域の集落を支える力が温存されていることがわかった(図3、図4)。

上谷地区では多くの子ども、孫世代が転出してしまっているものの、転出先としては西会津町内がもっとも多く、程窪集落が53.3%、泥浮山集落は45.5%、長桜集落は37.5%を占めていた。人数にすると各集落に20人前後が、同一町内という身近なところに居住している。さらに西会津町以外の福島県内へ転出した子ども、孫世代は程窪集落では17.9%、泥浮山集落では25.0%、長桜集落が27.1%になっており、各集落10人前後が福島県内への転出となっている。この福島県内への転出先としては郡山市、会津若松市、会津坂下町が多くなっていった。これは磐越自動車道で結ばれているラインであり、各市町ともにインターチェンジを有している。西会津町にもインターチェンジがあり、高速道路が整備されることにより、福島県内へ転出したとしても集落を支えやすい状況にあると考えられる。

以上の内容を踏まえると、確かに上谷地区では過疎化、少子高齢化が進行しており、限界集落となっている集落も存在している。しかし、町内への転出、高速道路が力を発揮している福島県内への転出人口は各集落においておよそ30人程度であり、その帰省頻度に関しても日々の世話や農作業の繁忙期、集落の集まりなど、上谷地区を維持していく上で欠かすことができない存在になっていることが明らかになった。

4. 地域調査運動と集落活性化

地域調査運動は、第2章で述べたように地元の人々が地元の資源、生態系サービスを見直し、それらを再活用することによって、自立的な生活様式を向上させ交流人口の活用によって集落レベル、地域レベルの活性化を図る方法である。調査は、1度だけ行うもので

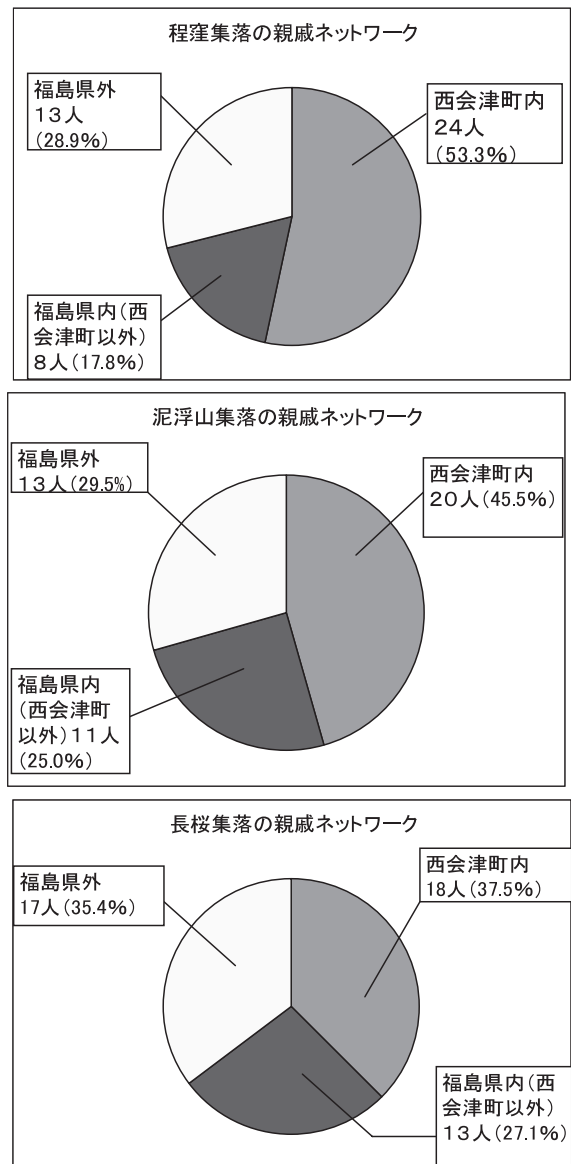


図3. 上谷地区における親戚の居住

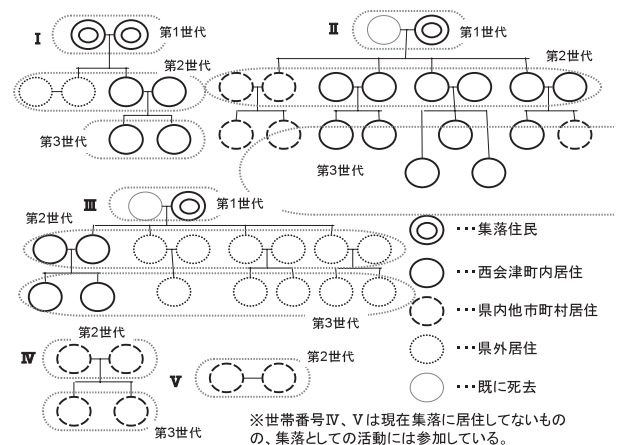


図4. 泥浮山集落の家系図

はなく、絶えず調べ学びあうという意味である。最初の段階の地域調査運動の内容は、集落の住民によるイベントと調査者と住民の交流から始まる。集落の住民はお客さんではなく主人公なので自ら参加する取り組みが必要となる。それがミニイベントである。交流は学生との交流、つまり異世代の交流である。次に、これから何をどのような手順で行うかの提案がある。もちろん1回程度の調査や交流で集落が動き出すわけではない。しかし、持続することによって変化が生まれてくる。

(1) 上谷地区自慢の地元料理展覧会と交流会

各集落から、自慢の地域食材を使用した料理を一世帯一品持ち寄ってもらい、地元料理の展覧会（写真5）を開催した。料理には上谷地区の『お宝』である山菜を使用したものや車麩を使用したものなどが並び、どの料理も手が込んでおり、とても美味しいものばかりであった。地区の方々普段食べているものを食べさせていいのかとおっしゃっていたが、料理を各テーブル



写真5. 地元料理の数々

ルに配置するのではなく、バイキング形式にまとめて配置したところ、地区にある様々な料理に驚いていた。地区にある普段の料理に関しても魅力を再認識することができた。

交流会には上谷集落全世帯のみなさん、西会津町役場の関係者、留学生を含めた学生、また西会津町長も参加していただき、世代を超えてコミュニケーションをとることができた（写真6）。これによって、日々大勢で交流することが少なかった上谷地区の方々に刺激を与えることができた。調査終了後に地域の方が集まり、地区の将来について話し合ったと連絡を受けた



写真6. 大交流会の様子

が、この調査を踏まえたうえで、互いが率直に思いを伝えたこの大交流会の成果と考えている。

(2) 上谷地区への提案『天空の郷』

今回の調査結果を踏まえ、今後の集落作りの方向性として、交流拠点『天空の郷』を提案した。この『天空の郷』を目指すポイントは次の4点である。1つは、拠点施設として現在休校となっている小学校分校の活用である（写真7）。この小学校は上谷地区のほぼ中央に位置しており、各集落へのアクセスも良好であった。今回の調査を行う際にもこの小学校を拠点としていた。さらに、地区全世帯の方を収容することも可能であり、薄れつつある地区としてのつながりのためにも重要な拠点と成りうる。また、校舎内部も広く、痛みが少なくきれいであったことから眠らせておくのではなく、施設として活用することを考えた。しかし、トイレを含めて設備は小学校のままであり、交流の拠点として活用するためにはある程度の改修が必要である。

2つは、来訪者、親戚が春・夏・秋に、自由に訪れ



写真7. 拠点候補の小学校分校

られる宿泊、交流施設の整備である。親戚ネットワークの調査から、上谷地区は山間部であり、積雪量も多いため県外の親戚はお盆のみの帰省であり、冬季にあたる正月には帰省していないことが明らかになった。このため、冬季の運営は行わない。また、地区の方々にとって運営していること自体が重荷をなってしまうよう、人の往来が盛んである土日祝日に限定した運営が考えられる。

3つは、地元の水・農産物・料理の活用である。交流会で振舞われた地元料理がとてもおいしく、調理技術もすばらしかったため、山菜をはじめとする山の恵みを活かした地元料理でもてなすことを考えた。そのためには、今後とも料理の展覧会を春夏秋冬に実施し、料理のレシピ集を蓄積すること必要となる。また、ヒアリングから5年ほど前までは地区においてそばも栽培しており、家庭でそば打ちをしていたことがわかった。特産物である山菜、キノコを活かすためにもそばを復活させることも目標とした。

4つは、地域住民、親戚ネットワークで運営主体の組織作りを行うことである。『天空の郷』の運営主体として地元住民だけでなく、親戚ネットワークも含めて組織することを考えた。この1つ目の理由としては、県外への転出者が北は函館から南は鹿児島まで、首都圏を含めて日本各地に居住しており、ロコミによる宣伝効果が大きく期待できたからである。2つ目の理由としては、転出した子ども世代へのヒアリングから、地区に残存している親世代が亡くなった場合、集落へ今までと同じ頻度、内容で通うことはしないつもりであることが明らかになった。このことから、現在の親戚ネットワークのつながりは地区、集落とのつながりではなく、地区に残っている肉親とのつながりであることが考えられる。既に示したとおり、上谷地区では高齢化が進行しており、現在、集落を支えている親戚ネットワークの持続性には陰りが見え始めている。つまり、人とのつながりだけではなく、地区、集落との

つながりを形成し、上谷地区を支えている親戚ネットワークが今後も機能させることが重要になる。

5. おわりに

本報告では、中山間地域の里山を活性化する方法として、生態系サービスの再評価と再供給を交流人口の増加という経済的需要に対応して進めることを検討した。具体的に生態系サービスを活用した集落活性化を論じる場合、まずは地域を知ることからはじめ、次いで身の丈サイズのイベントを行い住民参加のスタートを切ることである。それで自動的に集落活性化が起きるわけではないが、こうしたイベントも出来るという実感を共有化するところから集落活性化は始まる。西会津町の実践では、①景観調査②お宝マップ調査③集落ヒアリング調査（親戚ネットワーク調査）を行い、その成果を持ち寄って学生達との交流会を開催した。またイベントとしては食の展覧会を実施して住民参加によるイベントを印象付けた。今回の地域調査運動は、学生達と集落住民との交流を中心に行った。この方法は効果的であるが、一過性に終わらせない工夫が大きな課題である。

参考文献

- JA いいやまみゆき (1993) 『環境にやさしいふつうのふるさとづくり』JA いいやまみゆき地域計画報告書。
- 小金澤孝昭 (1991) 「農業・農村の再編成と地域農業振興」経済N0, 324.
- 小金澤孝昭 (2007) 「地域農業振興と食文化・食育」経済地理学年報 53 - 1.
- 小金澤孝昭 (2009) 「たんぼと地域の人々」『地理』54-6 古今書院。
- 日本の里山・里海評価 (2010) 『里山・里海の生態系と人間の福利：日本の社会生態学的生産ランドスケープ』概要版 国際連合大学・東京。